磨製石斧の土器収納

栗島　義明

資源環境と人類　第 12 号　1-19 頁　2022 年 3 月
Natural Resource Environment and Humans
No. 12.　pp. 1-19.　March 2022

資源環境と人類　第12号　1-19頁　2022年3月
Natural Resource Environment and Humans
No. 12. pp. 1-19. March 2022

磨製石斧の土器収納

栗島　義明[1]*

要　　旨

縄文時代には土器を容器として転用し，その中に磨製石斧を収納した例が認められる．全国で集成された資料は18例認められ，その時期は中期から晩期にわたっている．容器とされた土器は深鉢形や瓢箪形，注口形など，特定の器種が用いられることはなく，しかも殆どの土器の器面に熱を受けた赤化現象やススの付着が確認されており，転用されたことが明らかである．この中に収納されるのは磨製石斧のなかでも定角式と呼ばれる形態のもので，１点から最多で10点の収納例が確認された．基本的に欠損品は収納されていない．

土器に収納された磨製石斧は完成品が殆どで，収納方法を見ると小型品を底部側に納め，その上に中型品，そして大型品を最上面に配置するという特徴がある．一部の資料ではさらに黒曜石を載せ，板状の大型礫で土器に蓋をするような現象も確認されている．

磨製石斧の収納状態や使用された石材などの検討を通じて，このように土器に磨製石斧の完成品を収納する背景を考えた．特定の石材で製作される磨製石斧は貴重品であり，交易等での入手の機会は限られている．そこで定期的に確保できた磨製石斧を集落内やその周辺に仮置きし，必要に応じてそこから取り出して使用していたと判断した．このような磨製石斧の土器収納という行為は，限られた資源を効率的且つ節約して使用する為に縄文時代の人々が考え出した対処手段であったと評価する．

キーワード：縄文土器，埋設土器，定角式磨製石斧，石斧収納

1　はじめに

縄文土器は煮炊き用に用いられるだけでなく，時として物資を収納する容器として用いられたことも在ったようである．本論で検討する磨製石斧をその内部に収納した土器については特定の器種・形態に限定されるものではなく，またほぼ例外なくその器面には加熱による変色や吹きこぼれに伴う炭化物の付着が認められることから転用品であることは明らかである．容器としての機能を停止し転用された点については，これらが深鉢であったり注口土器であったり，或いは壺形・瓢箪形など多様な器種・形態が選択されているという事実からも証左されようか．では何故に煮沸用の土器が特定遺物の収納容器へと転用されたのか，そして何よりも土器内部に磨製石斧を収納するという行為の実体及び社会的な意味や背景は一体何であったのか，本論ではこの問題について取り組んでみることにしたい．

さて，縄文土器が煮沸容器から収納用の容器へと転用されている事例，その内部に遺物が収納されるという事例が知られる契機となったのが千葉県古作貝塚の資料であろう．二個体の蓋付壷形土器内部から貝種を異にした多数の貝輪，しかも殻面や縁辺部が入念に研磨された完成品が認められたことは土器への収納行為が単純に日常品の一次的保管，管理状態を示すものでないことを示唆している．加えてその中には希少性の極めてたかいオオツタノハ製の貝輪も含むことなどを考えると，こうした土器収蔵行為が交易・流通という先史時代の経済的行為

1　明治大学黒耀石研究センター　〒101-0064　東京都千代田区神田猿楽町1-6-3
＊　責任著者：栗島義明（yo_kuri@meiji.ac.jp）

の一端を反映した可能性も浮上してくるのである.

著者は茨城県冬木Ａ貝塚の貝輪収納事例（ベンケイガイ製貝輪９点，オオツタノハ製貝輪11点）の再検討を通じ，土器に収納された貝輪製品についての特徴を次のように纏めるに至った（栗島・別所2020）.

１）ベンケイガイとオオツタノハという貝種を異にした貝輪収納

２）底部にオオツタノハ製貝輪，上部にベンケイガイ製貝輪を収納

３）製品化された貝輪は貝種毎にパッケージ化

恐らくは貝輪収納状態が不明であった古作貝塚例（八幡1928）に関しても，容器内部では同様な収納状態を保っていた蓋然性はたかいと判断され，両事例が集落内でありながらも住居群からやや離れた場所に土器が埋設されていた点でも共通性を見出すことができる．重要な点は素材となった貝の由来・系統を違えているにもかかわらず，遺跡内で貝輪へと製品化されたうえで同一土器の内部に収納されているという事実で，単に集落構成員が脱着したものを一時的に土器内へと仮置きしたとは到底考えられない．在地産のベンケイガイ製のみならず希少性のたかい遠隔地から入手したオオツタノハ製貝輪も収納される点を考慮すれば，当然それは集落内での需要にかかわるものではなく他地域への持ち出しを視野に入れた，交易品として準備されたものであったと評価するのが妥当であろう（栗島2020）.

ところで縄文時代には同様に縄文土器を収納容器として転用し，その内部に磨製石斧を収納した事例も良く知られている．貝輪収納例と同様に転用土器の内部に遺物を収納する行為がどのような意味を持つものであるのか，また内容物を問わず相互に関連性を有するものであるのか否か比較する意義は大きいと考える．同時にそうした比較研究を行なうことによって収納行為の意味や背景，社会的な意味について探ることも可能になるかも知れない．本論では貝輪収納事例の検討に続き磨製石斧の土器収納例を検討することで，こうした研究課題へのアプローチを試みていくこととしたい.

２　収納事例の様相

縄文土器が収納容器として転用された確実なケースとしては，上記したような貝輪を始めとした装身具類の収納事例が僅か２例である[1)]のに対し，磨製石斧を収納した事例は現在18例程が確認されている．本章では磨製石斧の土器収納事例を遺跡単位に検討し，容器として使用された土器や収納された磨製石斧の特徴，収納状態やその特徴等について，順次，確認していくことから始めてみたい.

東京都　塚場遺跡（笹津1956）

磨製石斧の収納事例としては比較的早い1955年に八王子市で発見された資料で，単独で出土した収納用の土器は堀之内式の注口土器である．この注口土器は高さ14.5cm，胴部19.0cm，底径6.0cm を計測し，特徴として報文では「注口の基部及び胴部の中央に細いミミズ腫れ状の隆帯を廻らせて施文部を画しその間を同様な隆線によって不規則な曲線」の存在が指摘されている．また口縁部と胴部をブリッジ状に連結する対となる把手部，及びそれに直交する胴部箇所に半円状の把手状の突起が対で観察されることから，古作貝塚例と同様，土器に紐かけをして密封した状態で石斧が保管されていたものと想定された.

土器内部から出土したとされる磨製石斧は４点で，掲載された写真からは細身の資料とやや幅広の資料がそれぞれ２点確認でき，いずれの資料も完形品でその刃部箇所に刃こぼれ等を認めることはできない．やや大型の幅広例が凝灰岩, 小型の細身のものが碧玉製に該当しよう.

東京都　御殿山遺跡（武蔵野市史編纂委員会1982）

井の頭池を望む台地上に位置する本遺跡では，1962年の調査の際に第１号住居址内から打製石斧２点と磨製石斧１点が入れられた埋設土器が発見されている．土器は深鉢形を呈した称名寺式土器で高さ40cm，口径31.5cm を計測し，住居内のピットに「直立の状態で埋めてあった」らしい．報文では「完形深鉢土器が直立の状態で埋め‥‥土器の中から打製石斧二個と小型磨製石斧一個を検出」と記されているが，平面図並びに写真を見る限りは P7ではなくそれに隣接した内側の床面か

らの出土であったと考えられる．土器に収納された石斧についての記載は一切見当たらない．

注目されるのはこの「土器に接して33×27cm，厚さ8cm の扁平の大きな自然石」が検出されている点である．住居内に設置されたピット内に大型土器を正位に埋設し，その中に磨製・打製石斧を収納して後，隣接して出土した大型扁平礫が土器の蓋石として用いられていた蓋然性はたかい．

東京都　武蔵台遺跡（都立府中病院内遺跡調査会1996）

武蔵台遺跡の北縁部から発見された単独の埋設資料であり，時期的には埋没谷を挟んだ武蔵台東遺跡との繋がりがより強いことが指摘されている．埋設土器は加曽利Ｅ式終末期に該当する瓢箪形を呈した土器で，文様は総て微隆起線によって描出されている．計測値は器高27cm，口径7～8cm，上半の球形胴部最大径14cm，下半の球形胴部最大径18.5cm，底部径は6cm 測る．括れ部を挟んだ上下胴部には左右対称に把手が付けられており，口縁部側の把手両端側には径5mm 程の貫通孔が観察できる．土器の器厚は極めて薄く2～3mm の箇所も在り，また土器表面には白色の付着物の存在が指摘されている．この瓢箪形土器の上位面には，半分程に割れた深鉢形土器（口径15cm，器高11.5cm，底部径4.5cm）が被せられていた．

収納された磨製石斧６点は大きさを違えてはいるがいずれも定角式であり，用いられた石材は硬質砂岩と緑色凝灰岩，細粒凝灰岩の三種である[2)]．硬質砂岩製が長さ12cm 以上の大型品の石材とされ，凝灰岩類は長さが8cm 以下の中･小型品に用いられている傾向が確認でき，その「全ての刃部には，使用で生じたと思われる刃こぼれ」の存在が指摘されている．収納状態については写真資料によって磨製石斧の配置状態等の概要を知ることが可能である．即ち，土器の底部に先ず小型品が軸を交差させるように設置，その上に中型品が刃部を揃えるように置かれ，最上部にはその逆方向へと刃部を向けた石斧が配置される．7～8cm という口径と胴部が縊れた瓢箪形という土器形態を考えると，このような磨製石斧の配置は意図的になされていたものであった可能性が指摘できよう．

千葉県　河原塚遺跡（大森・須賀2015；松戸市立博物館2016）

河原塚遺跡は国分谷の奥まった小規模な舌状台地上に残されており，資料自体の発見は古く1955年に実施された古墳調査時，墳丘下に堆積していた貝層中から発見されたものである．土器は後期堀之内１式の注口土器で，胴部上半部の箇所には沈線が横位に巡り口縁部には円弧状のモチーフが描かれている．土器内部からは長さ5.9㎝，幅3.2cm，厚さ1.38cm，重量は40.6g の「緑色砂岩」製の小型磨製石斧が１点発見された．この磨製石斧は定角式で使用痕分析から皮なめしや軟質の木材加工に用いられたと報告されており，さらに着柄痕跡が見られないことから直接手に持った状態で使用されたと判断されている（岩瀬2015）．

報告では当該土器が純貝層中から直立した状態にあり，内部に収納された石斧は斜め下方向に刃部を向けた状態で発見されたこと，土器内部には石斧と共に「灰様の土が充満」していた様子が記録されている．貝層中での直立した出土状況からは何らかの遺構を伴う掘込み状態を伺わせており，それが貝層の形成とは若干の時間差を持っていた可能性がある．そうした考えを支持するように土器と同時期の遺構群は周囲部にではなく，土器埋納の箇所から離れた地点に残されていたことが報告されている．

神奈川県　上土棚南遺跡（綾瀬市教育委員会2008）

相模野台地中央部に位置する本遺跡の第 ５次調査時，調査区北側の遺構群が希薄となった区域から磨製石斧７点を納めた堀之内２式の深鉢土器が検出された．土器は朝顔形に口縁部の広がる形態を持ち，口縁部の大半は失われているが，胴部には磨り消し縄文による横位方向の菱形文が観察できる．大きさは残存部で高さ約14cm，底径約9.5cm，この土器内部に磨製石斧が重なるように収納されて発見された．

検出された磨製石斧7点はいずれも完形品であり，最も大型なもので長さが10.5cm，幅が4.8cm，一方で最小例は長さが2.5cm，幅が1.3cm という極小型品であった．石斧の収納状態は写真でしか窺うことができないが，先ず小型品２点が軸を同じくするよう土器底部に置かれ，その上に中型品を軸が直交するように置いた後，やや大

きな中型品３点を略軸方向と刃部を揃えて配置している．なお１点は側面を上側にするように壁面に近い箇所に置かれた様子も確認できる．石斧の石材についての記載は見当たらないが，本遺跡からは他に20点程の磨製石斧が出土しており，それらは凝灰岩・蛇紋岩・緑色岩等が用いられているという．収納された石斧７点をその色調等から判断すると，少なくとも３種類程の異なった石材が使用されていたと判断される．

神奈川県　久保ノ坂（No.4）遺跡（神奈川県埋蔵文化財センター1998）

宮ケ瀬遺跡を構成する本遺跡では単独で出土した小型深鉢形土器（堀之内２式）の中から，刃部を上にした状態で定角式の磨製石斧が１点発見されている．遺跡は中津川右岸の河岸段丘面上に形成されているが，周辺の遺構分布は散漫で後期の遺物も殆ど検出されていない．単独遺構と考えるのが妥当であろう．

土器は三単位の波状口縁を持ち口縁部には１条の刻目隆線文が水平に巡るもので，刻目隆線の下位には沈線文による枠状文が描かれその内側に細縄文が充填されている．器高20cm，口径17cm，底径9cm で，底部に網代痕を留めている．磨製石斧は硬質凝灰岩製のもので，長さが8.3cm，幅4.9cm，厚さ2.1cm．完形品で原礫面や敲打痕も留めた資料であるが欠損等は見当たらない．

埼玉県　塚越向山遺跡（合角ダム水没地域総合調査会1995）

遺跡は荒川支流の赤平川上流部に所在する縄文時代中期の集落遺跡である．この遺跡の６号敷石住居中央部に設けられた石囲い炉に埋設された注口土器の中から，黒曜石やチャートと共に10点の磨製石斧が発見された．報告書では注口土器内から「黒曜石塊３点，黒曜石剥片及びチップ14点，チャート剥片３点，定角式磨製石斧10点」が出土したこと，収納の状態が最上面に黒曜石塊と剥片類を置き，その下に磨製石斧が積み重ねられた状態であったことが明瞭に捉えられている．

注口土器は胴部に粗く不鮮明な縄文が施文された加曽利ＥⅣ式で口径24cm, 器高19cm, 底部径6.6cm を計測し，無文帯の口縁部は内傾し一対の橋状把手を有し片方の把手下に注口部を備えている．土器口縁部は被熱により灰褐色に変色し，また胴部上半には炭化物の付着が顕著であることから，この個体が煮炊き等に使用されていた点は疑いを挟む余地がない．

本資料は黒曜石が確認された時点で回収され，その下位に発見された磨製石斧の収納状態が明瞭に捉えられた基準的資料の一つとなった．即ち「底部に刃部を注口に対して垂直に向けた小さい磨製石斧を置き，その上に刃を注口側に向けて載せる．その上に，注口側とその反対側に向けたものを２点並べる．次に，注口側に寄った位置に小さいものを置いた上に大きい磨製石斧を載せ，横に注口土器の内面に沿うように添える．最後に最も重量のある磨製石斧を載せ，注口土器の内面に密着するように２点の磨製石斧」を収納した状態が明らかとされた．石材は総てが緑色岩で，全点に使用痕及び着柄痕が確認されている．

本資料でもう一つ注目されるのが土器内部に残された土層にあり，黒曜石塊と磨製石斧との間では内部の堆積土が変化していること，そして磨製石斧を含む部分では「粘土質の灰褐色土」が充填されていたとの重要な指摘がなされ，その粘土充填の目的は土器内部で磨製石斧が動かないよう固定する目的であったと推測している．なお，掲載写真には注口土器の北西箇所，約20cm の場所に20×15cm 程の板状砂岩を確認でき，他事例を参考とすれば本例などは注口土器の蓋石であった可能性も考慮すべきかも知れない．

埼玉県　合角川入岩陰遺跡（合角ダム水没地域総合調査会1995）

本遺跡は塚越向山遺跡の上流約2km の地点に存在した小規模な岩陰遺跡である．岩陰遺跡の岩壁部に形成された狭小なテラス部に，後期初頭の瓢箪形土器（称名寺Ⅰ式）と共に２点の磨製石斧が残されていた．本例は収納状態を保持した事例ではないが，２点の磨製石斧がその基部を重ねるように良好な状態で検出され，その周囲を取り囲むように土器片10点が出土していることから，元来は瓢箪形の土器内部に磨製石斧が収納された事例と考えて良いであろう[3)]．

土器は破片ながら把手部，胴部，そして底部破片も含まれており，縦方向に貫通した把手が胴部箇所に対に配されていることが分かる．胴部には微隆起線による渦巻き文が施され，底部は高台付きである．磨製石斧が完形

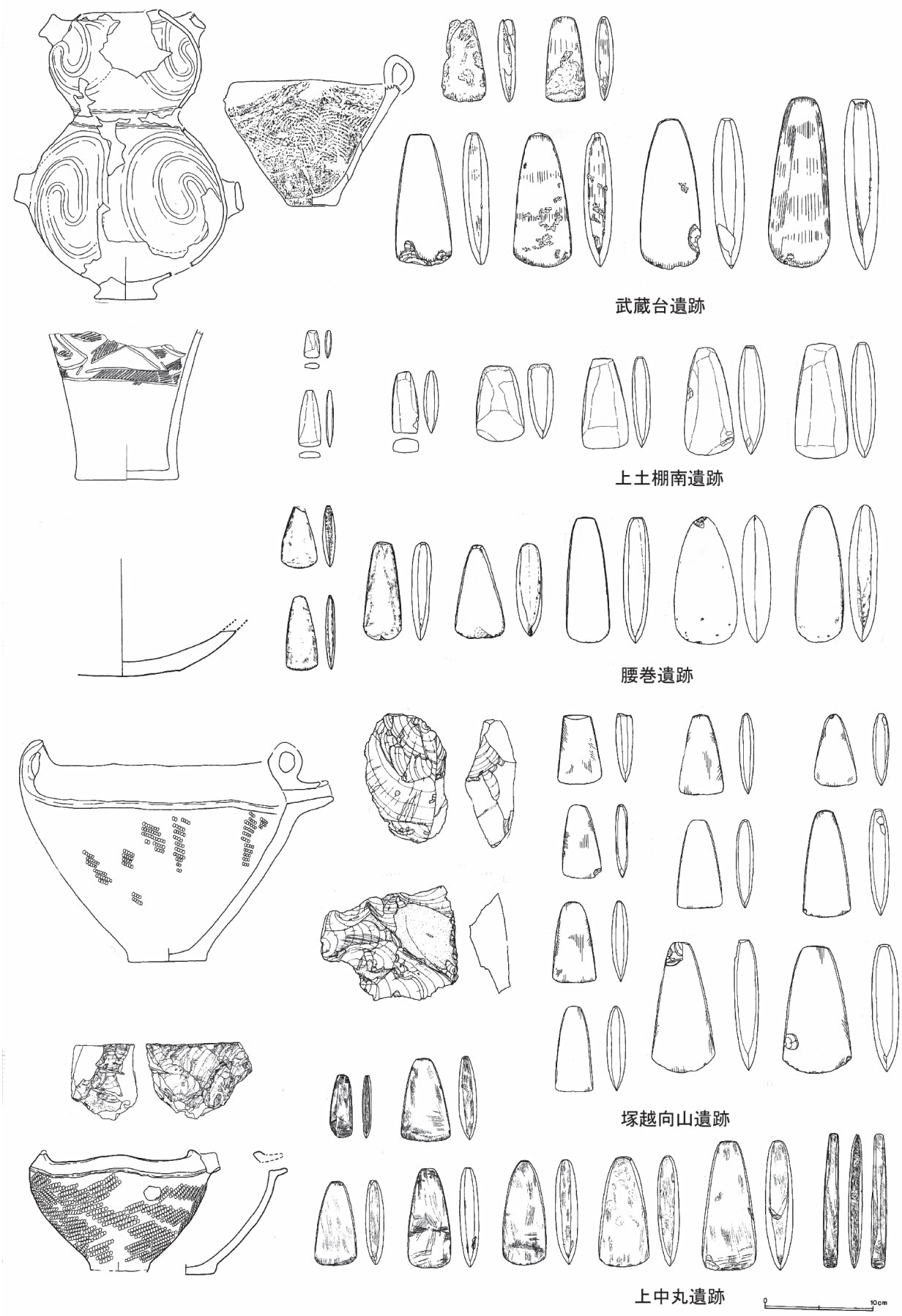


図１　磨製石斧収納事例（１）

品であることに加え，用いられた土器が瓢箪形である点も他事例との類似性を示唆している．報告では「内面朱彩の可能性を持つ」点にも注意が払われている．

２点の磨製石斧は大型に分類され長福それぞれ12.5×4.8cm，10×5.4cm を計測する．刃部に僅かな刃こぼれ状の使用痕を留めているが，完成品と捉えることに問題は無いであろう．その出土状態は上述したように互いが基部を重ねるように交わりつつ，刃部を上側に向けるやや特異な状態で出土している．

埼玉県　石神貝塚（小田・金子・金子1975）

大宮台地南部に位置する石神貝塚は，縄文後期初頭から晩期初頭にかけて営まれた大規模遺跡である．石神貝塚では台地上に複数（A ～ E）の地点貝塚が知られており，これまで断続的に調査が実施されているが，石斧を収納した土器が検出されたのは1966年に武南学園が主体となった A 地点の調査である．地表面下約1.5m の貝層下から検出された住居跡床面に残された「深鉢形土器の中に，蛇紋岩製の２点の美しい磨製石斧が内蔵」されていたという．土器の詳細は報告では触れられていないが，本１号住居跡からは同じ床面出土の土器として堀之内Ⅱ式の土器が紹介されており，同時期の資料と考えて間違いはないであろう．

２点の石斧は「破損品だが共に美しく（中略），土器に入れられ大切に住居内に保管されていた」．磨製石斧の大きさについては，刃部を欠損したやや大型のものが10.2×5.8cm，基部を欠損する中型品が6.6×5cm．また石材について「硬玉製と蛇紋岩製の磨製石斧」と記載されている．本事例の重要な点は土器に収納されていた磨製石斧が完成品ではなく，いずれも欠損品であったということにある．

群馬県　腰巻遺跡（梅沢・飯島1983）

鏑川中流の右岸段丘面上から1962年に偶然発見された資料で，大型の深鉢土器底部に７点の磨製石斧が収納されていた．詳しい出土状態や収納状況は不明であったが，土器内部には石斧圧痕を留めた土砂が存在していたとされ，製石斧が土器に収納されていた点については間違いないと考えられている．

無文の深鉢形土器は残念なことに底部付近のみが残存し，口縁部から胴部に相当する部位が失われていた．報告では胴部の径が30cm を上回る大型品であったこと，そして胴部下に横位の平行沈線が描かれていた可能性が指摘されているがその詳細は不明．他にも少数の土器片が回収されており，それらと同一時期と捉えると本例は縄文時代晩期の資料である可能性がたかい．

発見された７点の磨製石斧は「若干の刃こぼれを有する」がほぼ完製品状態を示しており，それらの資料は凡そ三形態への区分が可能である．最小例は長さが6～7cm，中型が9～13cm，大型のものが18～19cm を計測する．使用された石材については貴蛇紋岩，閃緑岩，変斑糲岩の3種類とされ，少なくとも複数石材が用いられている点は間違いないであろう．また石材は石斧形態に対応するよう選択されているようで，専ら小型品は貴蛇紋岩，中型品が閃緑岩，大型品は変斑糲岩を用いている傾向が確認できる．使用痕については判然とし難いが，刃部に刃こぼれ状の小剥離があり未使用状態ではないことは明らかである．

山梨県　上中丸遺跡（富士吉田市教育委員会2016）

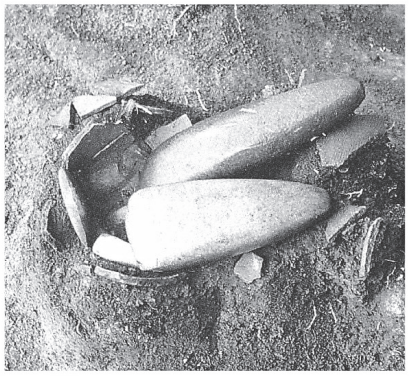
相模川上流部に位置する富士吉田市で発見された当該資料は，トレンチ壁面で検出されたことから土器の埋設状態及び磨製石斧の収納状態を良好に留めている．遺跡自体は縄文時代中期末葉～後期段階に位置づけられるが，周囲からの遺構確認がなされておらず単独と捉えられる．土器は中期末（加曾利ＥⅣ式）の注口土器で器高10.9cm，最大径17.7cm でこれが収まるように掘られた土坑内に設置されていた．

土器内部に於ける磨製石斧８点の配置を見ると，まず土器底部から順番に基軸を揃えた３点の石斧が並べられ，その上に軸方向を違えるように直交させた磨製石斧１点を重ねる．最上面にはこれと斜め方向に交わるよう，刃部を互い違いにして磨製石斧を並べるように載せていたことが分かる．最後にこれらの磨製石斧の上に黒曜石塊（7.1×9.9cm，重量420g）が置かれている．注目されるのは試掘時，この黒曜石の上位面に「ヒン岩」製の大型扁平礫（長さ39.5cm，幅27cm，厚さ3.5cm）が注口土器口縁部を覆い隠すよう置かれていた点にある．これにより本資料が小さな土坑内に注口土器を正位に置き，その内部に磨製石斧８点と大型の黒曜石塊を載せ，更に注口土器を覆うように大型扁平礫を設置した様子が復元さ

武蔵台遺跡

博毛遺跡

広原遺跡



秋大農場南遺跡

合角川入岩陰

図２　磨製石斧収納事例（２）

れた[4)]．

石斧石材については報告書中でホルンフェルス，凝灰岩等の遺跡周辺で獲得可能な在地産石材が使用されたことが指摘されている．石斧刃部には摩滅や刃こぼれが認められることから，これらが未製品や未使用の完成品ではなく使用途中の資料が収納されたと断じている．石斧上位面に置かれた黒曜石塊は蛍光Ｘ線分析により，長野県霧ケ峰（和田峠系）産であることが判明した．

長野県　宮崎遺跡（宮下1984）

千曲川中流域に位置する宮崎遺跡から1948 年に発見された資料で，平石などが配された敷石住居状の中から磨製石斧４点を収納した深鉢形土器が発見された．1982 年の報告では「1m 四方の一枚の敷石の下に縄文施文の鉢形土器が埋置，その中に使用の痕跡が全く認められない定角式磨製石斧４点が収納され，付近に小形磨石斧１点と耳栓（じせん）が置かれていた」ことが記録されている．

石斧収納状態を示す図面はないが掲載写真からもその概要を知ることは可能で，それによれば検出段階に磨製石斧類は基部を土器底部側，刃部を上方向に向けるというやや特異な状態で収納されていた．磨製石斧の使用石材はいずれも蛇紋岩で，使用痕などは一切認められなかったらしい．また土器付近からは小型の磨製石斧と土製耳飾りが確認されているが，共伴の可能性は低いと判断されている．

報告された土器は器面に斜縄文が施された薄手のもの

で，口縁がやや内湾する深鉢形と考えられる．資料は敷石住居内からの検出事例として報告されているが，残念ながら両者の同時性等についての確証は得られていない．また写真からは土器に接した状態で大型扁平礫の出土が確認でき，本資料が敷石住居を構成するものではなく蓋としての機能を負っていた可能性も考えておきたい．

長野県　尖石遺跡（茅野市教育委員会1957）

1940年の尖石遺跡発掘調査の際，土器の中に磨製石斧が収められた状態で発見されたことが報告書に記載されている．それによれば同年に１号住居跡の調査時，遺構の東北隅に存在した「積石」を掘り下げていると，その中から発見された直立した１個体の土器の「内には黒土が填まり，その黒土の中に青色の小型磨石斧が一個入れてあった」という．

出土した土器の型式や詳細は不明であるが，本例は磨製石斧の土器収納事例の報告事例として最も初期のものと言える．土器は恐らく縄文時代中期のものと考えられる．

長野県　広原遺跡（長野県富士見町教育委員会2021）

広原遺跡は釜無川の上流部にある程久保川左岸の平坦な丘陵上，標高約960m に位置している．遺跡は環状を呈する地域の拠点集落と考えられているが，本資料は集落から埋没谷を隔てた別丘陵上から2020年に発見され，縄文中期の住居に伴ったものとされている．この住居（J3）は平安時代の住居によって壊され炉跡と柱穴が５箇所検出されたのみで，炉内からは曽利Ⅲ式の両耳壺が横位状態で発見された．磨製石斧が収納された深鉢形土器は曽利Ⅳ式の底部が打ち欠かれた埋甕であり，現存部で器高が27.2cm，口径が25.2cm を測る．磨製石斧２点は長さ，幅がそれぞれ14.3×5.7cm，13.5×4.5cm という大型の定角式石斧であった．用いられた石材は「曹長岩」と報告されている．石斧は刃部を底部側に向けて揃え重ねるように収納されており，やや特異な出土状態であったことが分かる．

ところで J3号住居は炉跡出土土器から曽利Ⅲ式に対比されているが，出入り口部相当箇所の埋甕と認定された石斧収納土器は曽利Ⅳ式に相当する．報告書の平面図からは本埋甕が床面から20cm 以上も浮き上がった状態だったことが確認でき，しかも周囲は「攪乱（風倒木痕）」であったことが記録されている．「埋甕自体は後世の倒木痕によって引き上げられ，原位置を保っていないが‥‥‥平面的な位置は大きく動いていない」と報告されているが，住居とは時間を違えた単独遺構と捉えることも可能かも知れない．

新潟県　正面ヶ原 A 遺跡（佐藤1999）

詳細は不明であるが縄文晩期の大規模な集落址である正面ヶ原 A 遺跡，その広場東縁部近くに埋設された土器の中から蛇紋岩製の磨製石斧２点が検出されている．概報から胴部上半部が打ちかかれた埋設土器内部には円礫14個が充填され，その下位の土器底部に磨製石斧が２点収められていたことが分かる．

磨製石斧は１点が完形品であり，もう１点は刃部のみを欠損した資料である．共に蛇紋岩を石材とした優品であり，土器の底部付近にその刃部を互い違いとして並べるように配置した状態が観察できる．なお本埋甕は単独遺構であるらしい．

福島県　博毛遺跡（福島県耶麻郡教育委員会1985）

只見川右岸の高郷村（現喜多方市）に位置する博毛遺跡は縄文時代中期～後期の遺跡で，磨製石斧を収納した土器は1985年に後期の土坑墓が密集するＣ区から発見された．165号土坑は径約180cm，深さが40～50cm を計測し，その東壁際に径23cm，深さ25cm 程の小ピット中に口縁部を欠いた深鉢形土器が埋設されていた．土器は大木8b 式の口縁部が失われた小型深鉢で土坑内の小ピットに正位状態で埋設されており，上位面には深鉢土器の底部が逆位に被さる状態で発見された．更に土器底部の上位箇所には拳大の礫が設置されていたことが報告されている．

石斧を収納した土器の大きさは高さが12.5cm，径が10.5cm，底部径が7cm の小型深鉢で，表面に焼成痕を残すばかりでなく内部にも炭化物が付着しており，煮炊きに使用されていたことが明瞭である．収納されていた４点の磨製石斧はいずれも小型品で，長さ・幅・厚さを確認すると最も大きな例で5.5cm ×1.6cm ×1.0cm，最小が3.4cm ×1.1cm ×0.7cm を計測する．石材については１点の黒色粘板岩製を除き，いずれも緑色や淡緑色を呈する良質の蛇紋岩製品と報告されている．石斧の表裏面には研磨時の線条痕が観察されるが，使用に伴う刃こ

ぼれ等については確認することができない．磨製石斧と共に両極技法による剥片を素材とした玉髄製掻器が１出土しており注目される．

秋田県　秋大農場南遺跡（秋田市教育委員会1992）

秋田市の南東部の丘陵上に位置する本遺跡からは，埋設された晩期深鉢形土器（大洞 C2式）の中から磨製石斧10点が検出されている．遺構検出状況や出土状態及び土器内の磨製石斧収納の詳細等に関し，報告書から確認することはできないが，同時期の遺構が他に検出されていないことから単独資料と判断して良いであろう．報告書に掲載された写真が出土及び収納状態を知ることのできる唯一の手掛かりで，そこには大中小の形態を異にする定角式の磨製石斧が刃先を揃えつつ，小型品が下位に置かれその上面に大型品が刃部を下方に向けて据え置かれていた大凡の出土状態が復元できる[5)]．

深鉢形の土器は胴部下半（残存部高約14cm，口径約18cm）であり，確認面が黒色土中にあることから上半部が耕作等で失われてしまったのであろうか．石斧は細身の小型品２点，幅広の小型品４点，そして大型品４点の合計10点である．大型品を中心にその刃部に僅かな刃こぼれを認めることができ，未製品や完成品によって占められたものではなく，使用状態のものも含まれると判断されている．石材についての記載は見当たらないが，少なくとも３種類の石材が用いられていることは確実である．

青森県　笹子（３）遺跡（青森県八戸市教育委員会1983）

笹子（３）遺跡は八戸市内から南西方向に約4.5km 離れた丘陵斜面に残された遺跡である．試掘調査時に磨製石斧を収納した土器が単独で出土したことから広範囲な本調査が実施されたが，同時期の遺構はおろか目立った遺物の出土も確認されなかったという．土器は後期前葉（十腰内Ｉ式）の壷形土器であり，口縁部から頸部にかけて破損しており器高が8.2cm，底径6cm，胴部径が10.2cm を計測する．

報告書に掲載された写真からは土器が正位の状態で，その内部に磨製石斧３点が収められていた状態を留めている．磨製石斧はいずれも完成品であり，刃部を土器底部側に揃えた収納状態であったことが確認される．石材は緑色凝灰岩で中型品が２点，小型品が１点という構成で，其々は長さ，幅が8.4cm ×3.6cm，7.6cm ×3.6cm，5.9cm ×1.6cm，厚さは中型の２例が2cm 前後，小型品は1cm 程を計測している．いずれの石斧刃部にも目立った使用痕跡や欠損部位を確認することはできないという．

３　収納行為の姿

縄文土器への磨製石斧収納事例について概観してきたが，その時期や容器となった土器形態や埋設状況，磨製石斧自体の特徴や収納状態等々でいくつかの注目すべき特徴を捉えることができた．本章ではこれらの諸点を概観することで，改めて収納行為の姿を客観的に捉える足掛かりを得て行きたい．

＜時期＞

まず磨製石斧の収納事例に見られる時期的な特徴である（表１参考）．東日本地域に点在する事例を見ると縄文時代中期以後，晩期に至るまで断続的に見られる現象であることが理解される．最も古いのが大木8b 式の土器に磨製石斧が納められた博毛遺跡例で，或いは尖石の例も同一期と考えて良いのかも知れない．他にも中期段階と考えられるものが武蔵台遺跡や塚腰向山遺跡，上中丸遺跡で確認されているが，それらはいずれも中期末葉と捉えられる資料群である．これに続くのが後期初頭（称名寺段階）と考えられる御殿山遺跡，合角川入岩陰の事例，その後に塚場遺跡，河原塚遺跡，石神貝塚，上土棚南遺跡，久保ノ坂 No.4遺跡，笹子（３）遺跡などの事例を位置付けることができよう．晩期段階では腰巻遺跡，宮崎遺跡，正面ヶ原 A 遺跡，秋大農場南遺跡が該当している．

収納行為が土器を用いたものであることから時期特定は好都合である一方で，該当資料が意外にも少ないことから指摘可能な事項は決し多いとは言えない．そのような中でも東日本地域に於いて磨製石斧を土器に収納するという行為が中期段階，より正確には中期中葉以後に開始されていたことを指摘することは可能であろう．磨製石斧が石器組成で確固たる地位を築くのは縄文前期以後であることを考えると，石斧量産化と土器への収納行為

表１　磨製石斧収納事例一覧（土器は残存部計測値，石斧数値は図版から計測例含，石質は報告名称）

出土地	遺跡名	時期	器種（器高×径 cm）	石斧数	長さ×幅 cm	石質	出土状態	その他
東京都	塚場	後期（堀之内）	注口土器（14.5×19cm）	4	?	凝灰岩，碧玉	不明（単独？）	
〃	御殿山	後期（称名寺）	深鉢形土器（40.8×31.5cm）	3	?	?	住居内ピット	２点打斧，蓋石？
〃	武蔵台	中期（加曾利ＥⅣ）	瓢箪形土器（27×18.5cm）	7	7.5×4.0，7.7×3.6 12×5.2，12.3×5.3 13.7×5.6，15.5×5.7	緑泥片岩結晶片岩 硬質砂岩	単独	１点出土場所不明
群馬県	腰巻	晩期？	深鉢形土器（径30cm？）	7	6.1×3.6，7.4×3.1 9.3×4.9，10×3.9 13×4.5，19.3×6.9 18×９	貴蛇紋岩閃緑岩変 ハンレイ岩	単独	
千葉県	河原塚	後期（堀之内１）	注口土器（10×14.5cm）	1	5.9×3.2	緑色砂石	貝層中直立	内部に灰？が充填
埼玉県	石神貝塚	後期（堀之内２）	深鉢形土器（25×22.5cm）	2	10.2×5.8，6.6×5	蛇紋岩，硬玉	住居跡	石斧は欠損品
〃	塚越向山	中期（加曾利ＥⅣ）	注口土器（18.2×24.2cm）	10	6.4×4.1，6.8×3.6 6.6×3.9，7.5×４ 7.4×4.2，7.9×3.5 8.1×4.2，9.9×4.4 12×5.9，11.8×6.4	緑色岩	敷石住居石囲炉内	黒曜石・チャート製剥片等17点，黒曜石塊３点隣接して蓋石？
〃	合角川入岩陰	後期（称名寺Ⅰ）	瓢箪形土器（破片）	2	12.5×4.8，10×5.4	緑色岩	岩壁部に設置	刃部が上位
神奈川県	上土棚南	後期（堀之内２）	深鉢形土器（14×14cm）	7	2.5×1.3，4.8×2 5.2×2.2，6.4×4.2 7.8×４，9.4×4.2 10×4.8	?	単独	
〃	久保ノ坂 No.4	後期（堀之内２）	深鉢形土器（20×17cm）	1	8.3×4.9	硬質凝灰岩	単独	刃部が上位
山梨県	上中丸	中期（加曾利ＥⅣ）	注口土器（10.9×17.7cm）	8	5.7×2.1，7.7×3.9 7.7×4.5，9.2×4.1 9.7×４，10.2×4.6 11×5.1，12.4×1.4	凝灰岩，ホルンフェルス	単独	土坑内に埋設石斧上に黒曜石原石扁平礫で蓋
長野県	広原	中期（曽利Ⅳ）	深鉢形土器（27.2×25.2cm）	2	13.5×4.5，14.3×5.7	曹長岩	住居内に埋設？	刃部が下位
〃	宮崎	晩期	深鉢形土器？	4	9.1×4.1，9×4.7 10.8×3.4，11.5×3.7	蛇紋岩	敷石下に埋設	刃部が上位
〃	尖石	中期	深鉢形土器？	1	?	青色の石材	住居内	
新潟県	正面ケ原Ａ	晩期	深鉢形土器（44.6×61.2cm）	2	8.8×3.2，10.5×5.2	蛇紋岩	単独	石斧の上に礫14点
福島県	博毛	中期（大木８b）	深鉢形土器（12.5×10.5cm）	4	3.4×1.2 4.1×1.0，4.0×1.3 5.5×1.6	蛇紋岩黒色粘板岩	土坑内の小ピット内に埋設	土器が合わせ口状円礫が蓋
秋田県	秋大農場南	晩期（大洞Ｃ２）	深鉢形土器（14×18cm）	10	4.4×1.2，4.6×1.5 4.2×2.4，4.2×2.5 5.5×3.4，5.8×3.2 13.8×5.8，14.9×5.8 16×5.2，17×5.1	不明	単独	刃を揃えて収納
青森県	笹子（３）	後期（十腰内Ⅰ）	壷形土器（8.2×10.2cm）	3	5.9×1.6，7.6×3.6 8.4×3.6	緑色凝灰岩	単独	刃部が下位

が直接的に結びつくのではなく，何らかの社会的行為として捉えるべき点を示唆していると言えようか．また収納行為が中期末から後期前葉にピークを迎えている点は，冒頭に述べた貝輪収納例（千葉県古作貝塚・茨城県冬木Ａ貝塚）やヒスイ・貝製装飾品の収納例（岩手県大向上平遺跡，青森県水上（２）遺跡）などと時間的整合性を有している点，改めて注意を払っておく必要があろう．

＜収納場所の類型＞

磨製石斧の収納された土器がどのような場所に埋設されているのか，この問題についてはこれまでにも注視されてきた．特にこの問題を詳細に論じた田中氏は石斧を収納した土器埋設空間について四類型を設けると共に，その背景にある社会的要因についても重要な指摘を行っている（田中1995）．その中で集落内に磨製石斧を集積しながらも土器を容器として用いない「小田内沼タイプ」，「武蔵台タイプ」は集落内ではなく領域内の交通路的な場所，「高屋館跡タイプ」は集落内の住居や墓に隣接した場所，そして「塚越向山タイプ」では集落内の住居にそれぞれ磨製石斧を収納した土器埋設と，それぞれの埋設場所が空間的に有意なものと捉えている．氏の類別を参考に改めて集成した資料群を見直すと，大凡三類別することが適切であろう．即ち土器埋設の場所が住居等の遺構内と考えられるⅠ類（御殿山，石神貝塚，塚越向山，博毛，広原，尖石，宮崎），集落内ではあっても住居跡などの遺構群とはやや離れた場所に埋設されたⅡ類（河原塚，上土棚南，正面ヶ原Ａ），そして集落から離れた場所に他の遺構を伴わずに単独で埋設されたⅢ類（上中丸，武蔵台，塚場，腰巻，久保ノ坂 No.4，秋大農場南，笹子（３））という大別である．

だが，ここで幾つかの問題点も指摘せざるを得ない．例えばⅠ類とした一般的には遺構に伴ったとされる埋設土器には，断定を躊躇せざるを得ない事例もある．御殿山遺跡例では１号住居とされたものが「加曾利ＥⅡ式に属する住居と，型式不明の住居跡計二個を切って設けられている」とされ，出土位置についても報告とは違う点は前述したとおりである．石神例でも同じ堀之内２式の住居跡どうしの切り合いが見られ，床面出土とされた

石斧収納土器が住居に伴うものか，特に掘り込み等の遺構を伴わずに潰れた状態で検出されている点は不可解と言わざるを得ない．

住居跡内からの検出が明確とされている塚越向山遺跡，宮崎遺跡ではどうか．いずれも敷石住居とは時期を違えている点は間違いなく，宮崎遺跡では明らかに敷石の下に該当土器の埋設が確認されているし，塚越向山遺跡例も６号敷石の石囲い炉中の検出と報じられているが，言うまでもなく当該資料は炉体土器ではない．注口土器は炉跡が廃棄され２層とされた赤褐色土が堆積した後，即ち住居廃絶後に時間を置いて石囲炉の中へと設置された可能性はたかく，また広原遺跡例も直ちに住居跡に伴うと断言できない点については前述したとおりである．注意を喚起すべきはいずれの事例についても石斧収納された土器が遺構に伴うものと理解されている点で，上記したように埋設土器が明確に住居跡に確実に伴うというに足る状況証拠が乏しい点については再認識しておく必要があろう．

＜収納用土器＞

磨製石斧が収納された土器についてはどうであったのか．深鉢例が最も多く11例が該当し，これに注口土器４例と瓢箪形２例，そして壷形の土器が１例と続く．時期別ではどうであろうか．中期では深鉢形が３例で注口土器が２例，瓢箪形が１例，後期では深鉢形が４例，注口土器が２例，瓢箪形と壷形が各１例，晩期では４例総てが深鉢形となっており，特定器種が選択的に転用されたという事実は認められない．

大きさについては注口土器が器高10～20cm，口径15～25cm と比較的その容量が小さいのに対して，深鉢形の土器では破損品が多くを占め大きさが不明である．唯一の完形品とも言える広原遺跡例では器高が27cm，口径が25cm を計る一方で，博毛遺跡では器高12.5cm，口径10cm 程の小型品が転用されている．磨製石斧の収納は前者が２本であるのに対して後者は４本であり，土器容量とそこに収納されている石斧の数量とは決して整合的ではない．これは武蔵台遺跡と合角川入岩陰の瓢箪形土器についても該当するところであり，収納する磨製石斧の数量に比例して器種や大きさを選択したとは断定できないのが実情である．無論，検出された磨製石斧の数量がそのまま収納時点での姿を反映しているとは言い難いうえに，空隙部には，製品を始めとした他の有機質遺物が収納されていた可能性も全く排除することは適切ではない．

＜石斧の特徴＞

土器に磨製石斧を収納した事例の中には石斧以外の遺物を収めたものも確認されている．御殿山遺跡では２点の打製石斧も一緒に収納されていたと報告されているが，極めて例外的であったと見做せよう．決して多いとは言えない磨製石斧の土器収納事例ではあるが，それらを概観すると武蔵台遺跡・腰巻遺跡等に代表されるように磨製石斧のみを収納した例と，塚越向山，上中丸の二つの遺跡で確認されたような磨製石斧に加え黒曜石等の原石や剥片が収められた例があった．後者については改めて検討を加えることとし，ここでは土器に収納された磨製石斧の特徴について再度，確認しておきたい．

本論で扱ったように土器の中から発見された収納品としての石器は，その総てが定角式の磨製石斧である．乳房状等他の磨製石斧はそこに含まれていないという顕著な特徴を示し，しかも石神貝塚と正面ヶ原の２例を除いてはいずれも完成品で刃部を始めとして目立った破損部は見当たらない．これ等の定角式磨製石斧の最大幅は例外なく刃部に在るが，その刃部長と石斧の身部長との対応関係を見ると1:2から1:3までのなかで変位している様相が指摘できる．最も多いのが1:2のやや幅広の印象を与える定角式の磨製石斧で，塚腰向山遺跡や上土棚南遺跡の資料がこれに該当していよう．一方で腰巻遺跡や博毛遺跡，広原遺跡などではそれが1:3のやや細身の磨製石斧の一群が主体となっており，上中丸遺跡，武蔵台，塚場，秋大農場南遺跡では両形態の磨製石斧複数が組成した様子を伺い知ることができる．

こうした磨製石斧の形態と共に見過ごすことのできないのがその大きさであり，個別資料の説明でも述べてきたが当該磨製石斧群は基本的に大・中・小の三区分が可能である．大凡の目安としては長さが6cm 以下で幅が2cm 前後のものを小型品，長さが6～10cm，幅が3～5cm のものが中型品，そして長さが10～18cm，幅が5～7cm のものを大型品と捉えることができよう．そう捉えると小型品からなる博毛遺跡，小型品と中型品から構

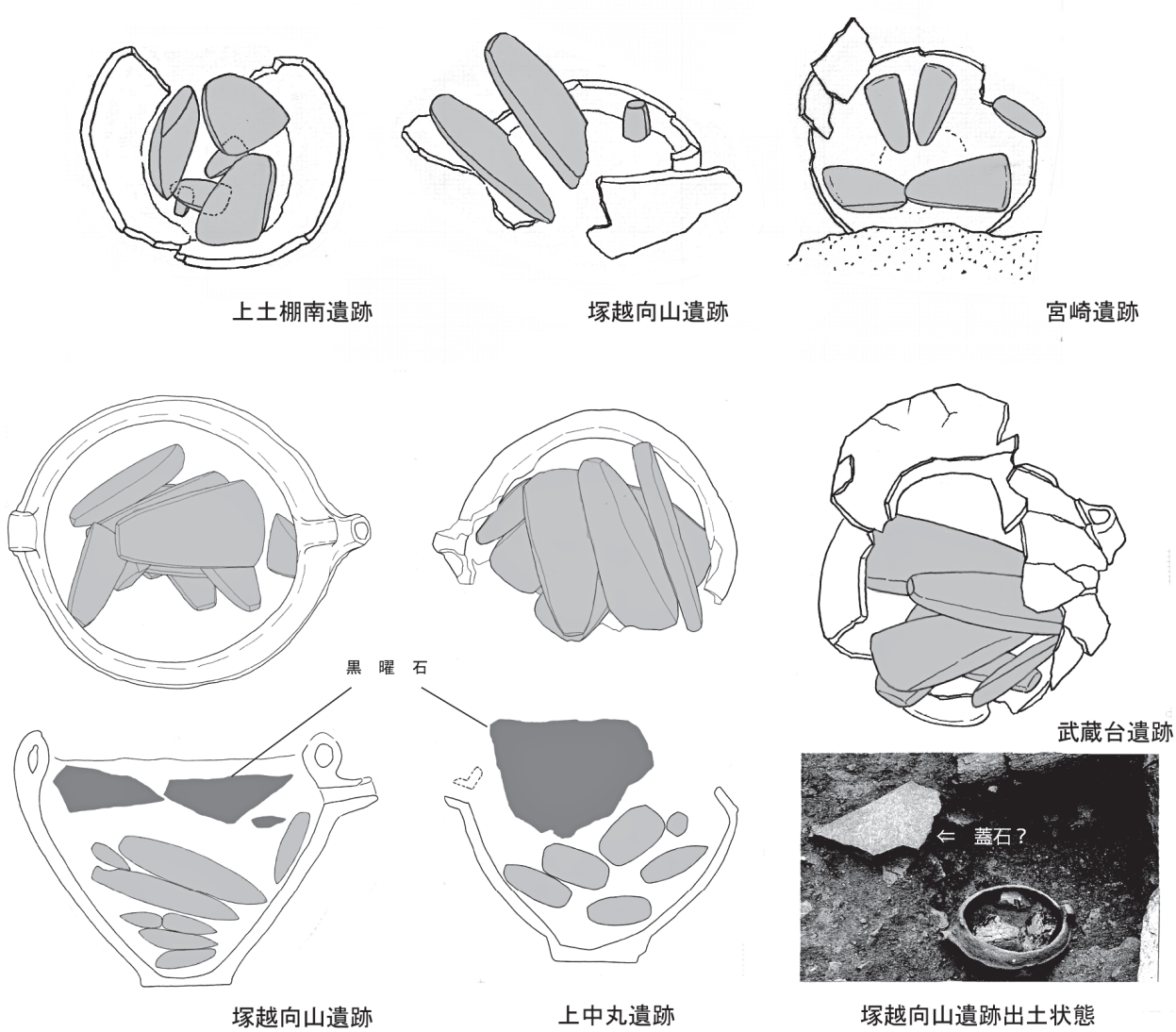


図３　磨製石斧収納状態（縮尺不同）

成される上土棚南遺跡，笹子（３）遺跡，大型品からなる広原遺跡，合角川入岩陰遺跡，それ以外の腰巻遺跡，武蔵台遺跡，塚越向山遺跡，上中丸遺跡，宮崎遺跡などは中型品と大型品を交えた構成となっている．秋大農場南遺跡は唯一，中型品を欠いた小型品と大型品のみからなる収納事例と言える．

土器に収納された磨製石斧についてその形態や大きさについて概観したが，遺跡（収納）事例を単位として多少の偏在性は見られるものの特定形態や大きさの資料が厳選されたうえで収納された形跡は窺えず，寧ろ大きさの組み合わせを意識したかのような構成を示すようである．腰巻遺跡や上中丸遺跡，そして秋大農場南遺跡での在り方はそのような見解を支持するという点からも示唆的であり，そこで確認された石斧形態や大きさのバラエティを保持した一括状態とは，既に土器収納時に意識されていた様子が窺われる．

こうした点に加え著者が注目するのが磨製石斧の石材についてである．土器に収納された磨製石斧石材としては緑色岩や硬質の凝灰岩・砂岩・蛇紋岩などが一般的で，これらの石材については意外にも打製石斧や他の剥片石器に比べると原産地の限られた希少性のたかいものであった可能性が指摘できる．例えば緑色岩や凝灰岩については特定の原産地が存在し，隣接した製作跡での集中的生産を背景として周辺各地へと流通していた事実が確認されている．いずれにしても打製石斧のように在地産の石材を主に用い，遺跡単位に製作されるという類の石器ではない点は明らかであると言えよう．その一方，各遺跡で異なった名称で報告されている石材，例えば蛇

紋岩（宮崎遺跡・正面ヶ原遺跡・博毛遺跡），碧玉（塚場遺跡），硬玉（石神貝塚），貴蛇紋岩（腰巻遺跡），曹長石（広原遺跡）などは，近年に新潟県糸魚川や群馬県鮎川等に産することが判明した「透閃石」と理解して良いのであろう（中村2010；松村2018）．尖石遺跡で「青色」の石斧とされたものも同一石材であった可能性はたかい．いずれにしても磨製石斧の素材石材の産地が偏在的であったことから，多くの地域では磨製石斧が希少品として扱われていた．特に「蛇紋岩」とされた一群の磨製石斧については，その獲得難易度がたかかったと判断して間違いないであろう．

＜収納方法＞

埋設土器への磨製石斧収納については幾つかの特徴的な姿を確認することができた．先ずは収納された石斧数では１点の例が３遺跡（河原塚･久保ノ坂 No.4 ･尖石），2～4点の例が９遺跡（塚場・御殿山・石神・合角川入岩陰・広原・宮崎・正面ヶ原Ａ・博毛・笹子（３））で，そして７点以上の例が６遺跡（武蔵台･腰巻･塚越向山･上土棚南・上中丸・秋大農場南）で報告されている．注視されるのは複数収納例では土器内部に於ける検出状態に特異な事例が確認できた点で，例えば扁平な定角式が土器内部で水平方向に設置されない例が宮崎遺跡，合角川入岩陰と広原遺跡，笹子（３）遺跡で確認された．前者では石斧の刃部が上位方向（口縁部側）に向けられ，後者では刃部が下位方向（底部側）に揃えられており，共に意図的に並べられて収納された可能性が指摘できようか．水平方向に置かれている資料でも，例えば正面ヶ原Ａ例では互いがその刃部方向を違えた配置が観察された．石神貝塚なども同じ配置を有していた可能性が考えられるであろう．

複数の磨製石斧収納事例のなかでは腰巻遺跡を除く４遺跡で，特に武蔵台遺跡と塚越向山遺跡，上中丸遺跡ではその詳細な収納状態を知ることができた．注意を要する点はこれらの磨製石斧の多数収納事例では小中大のうち複数形態の組合せが確認できること，そしてこれらが基本的には在地色の強い石材を用いて製作された一群であるという点にある．秋大農場南遺跡の磨製石斧石材に関する詳細は不明だが，小型品以外は間違いなく在地産凝灰岩であろうし，腰巻遺跡の貴蛇紋岩については鮎川流域に産出する石材が使用された可能性がたかいことから，これらが在地石材から成立しているとの指摘は決して的外れではない．他の事例についても緑色岩や凝灰岩･硬砂岩・粘板岩・ホルンフェルスなど，いずれも遺跡周辺の地域に産出する，広義の在地系石材を用いた磨製石斧群と捉えることが可能であろう．

磨製石斧がどのように土器の中に収納されているのか，既に遺跡単位の概要把握の段階で確認したところではある．その特徴を簡潔に述べるならば土器底面側には最初に小型品を設置し，次にその上に軸を違え或いは刃部を重ね交叉させるように石斧を置く例が塚越向山・武蔵台の２遺跡で確認され，上中丸遺跡では２点の中型品が並ぶように置かれている．その後は２点程を単位として順次石斧を重ねてゆくのが通例で，その最上部に大型の磨製石斧を設置してゆく傾向が上土棚南遺跡と秋大農場南遺跡で確認されている．最終段階の大型磨製石斧の設置が終了の合図・目安となっていたのであろうか．いずれにしても重なりを見せる単位どうしが磨製石斧の軸方向や刃部位置などで意図的な配置・配列がなされた，少なくとも無造作に土器の中に入れたものではなかった点については間違いないと言えよう．注目されるのが軸方向を違えながらも器体部を交叉させることがない点，石斧側面を上に向けて表裏面を土器器面に密着させるよう配置収納された資料が多いことにある．このような土器内部への設置及び配列行為を見ると，注口土器や瓢箪形の土器形態に応じて効率よく安定的に複数の磨製石斧を土器内部へと収納する為のものであった可能性が浮かび上がってこよう．小型品を土器底部に恰も敷くように置いていることや，軸方向を大きく違えぬように重ねてゆくこと，積み重ねてゆく途中で中・小型品の側面を上に起こした状態で器壁側に沿えている事実は，限られた容器の中に収納した磨製石斧が動かぬように安定させる意図があったのであろうか．塚越向山遺跡では土器内部での粘土質灰褐色土の充填が確認され，河原塚遺跡でも灰様の土の中から磨製石斧が検出されたことなどは，その意味でも極めて示唆的な事例と言える．

塚越向山遺跡と上中丸遺跡では，注口土器に納められた磨製石斧群の上位面に黒曜石塊が置かれ，更に上中丸遺跡にあってはその黒曜石の上位面には埋設土器に蓋を

するように板状礫が置かれている．塚越向山遺跡でも蓋に用いられた可能性のある板石がすぐ脇に存在し，同じように板石や扁平礫が隣接して存在する事例が御殿山遺跡や宮崎遺跡でも確認できた．武蔵台遺跡や博毛遺跡では小型深鉢等が意図的に割られたうえで蓋に使われていたが，博毛遺跡では更にその土器の上に拳大の礫が置かれていた．今後の資料蓄積を待つしかないが，磨製石斧の土器収納に際しては上記事例を参考とする限り，小型の磨製石斧から順次土器内部へ収納してゆき，最上位面へと大型品を配置することで一旦は収納が区切られ，更にその上に扁平礫や土器等で蓋をすることで行為が完了している．常に黒曜石等の配置が介在したのか否か判断できないが，石斧収納に際しては基本的にはこのような手順・工程が踏まえられていたものと捉えておきたい．

4　収納の機能・背景

本論では土器に磨製石斧を収納した事例について検討を加え，そうした行為が執り行われた時期や使用された土器や収納された磨製石斧自体の特徴，及びその配置性や埋設空間等に関する様相について検討してきた．最後に改めてその特徴を総括しつつ，問題点の整理をおこなうことで展望としたい．

第一に埋設された縄文土器の中に磨製石斧が収納される事例については，中期末～後期前葉に盛行する傾向を指摘することが可能であった．前後の時期にも同様な行為が執り行われている点については間違いないものの，本論で取りあげた少数事例を対象とする限りでもその盛行時期は限定されるようである．上述したように磨製石斧が安定化する前期以後に著しい増加現象を認めることはできず，特に関東地域では中期段階に至り磨製石斧自体の減少傾向が認められるなか，逆に土器への収納行為が顕在化してゆく現象は看過できない．加えて少数事例とは言え貝輪や貝・石製装身具の土器収納例も，ほぼ同じ時期に限定的に確認されている状況は決して見過ごせない．オオツタノハやヒスイなどの原産地が限られるが故，一種の「威信財」としての普遍的な価値を付与された遺物と同じく，磨製石斧についてもその石材の多くが希少性を持っていた可能性については上述したとおりである．中期末から後期前葉にかけて地域社会を超えた交易活動のなかで，こうした土器収納遺物の検討がなされるべき点を示唆していると言えようか．

ところで同様な現象が黒曜石の広域分布の中にも見出される点は，改めて注視しておく必要があろう．石器素材として活用された黒曜石の広域的分布を支える流通・交易体制については，度重なる議論がなされてきたが，それを支えた考古学的現象としての一括埋納事例が注目されて久しい（長崎1984；山科2010）．原産地から各地へと持ち出される黒曜石の分量・流通形態やそのルートを反映した一括埋納は，長野県域で50遺跡から115例が確認されており，そのピークが前期末から中期初頭にかけてであったこと，中期段階ではやや少なくなるものの急激な減少が後期以後だったことが指摘されている[6)]．また黒曜石の一括埋納が前期から中期初頭までは集落内に残されるが，中期中葉以後からは住居内のピットに埋納され，後期段階に至っては一転して住居外のピットへとその埋納場所が変化するという．こうした在り方は磨

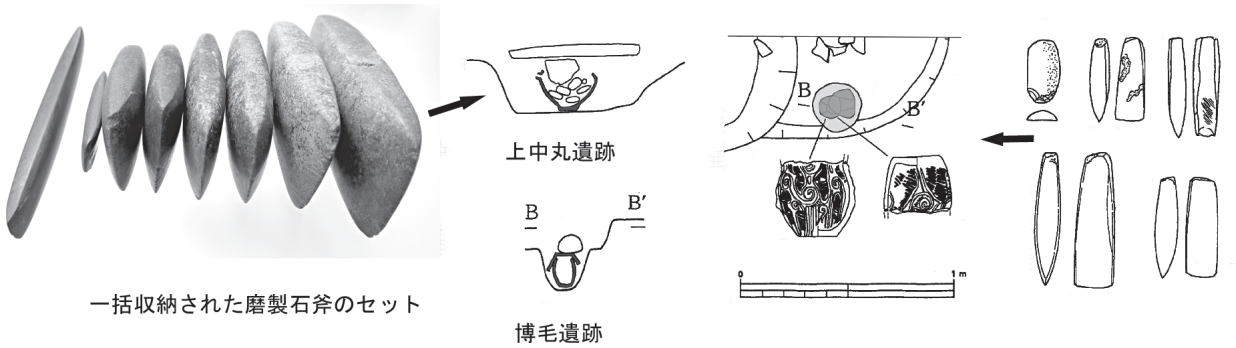


図４　土器の埋設状況

製石斧を収納した土器埋設の選地と相関性を成立させているのであろうか.

加えて著者が注目する現象として，黒曜石原石を一括埋納する際に土器に収納した事例が長野県（宮崎遺跡・安庭遺跡･志平遺跡）や山梨県（小和田遺跡･尾咲原遺跡･三光遺跡），そして神奈川県（北原 No.9遺跡）などで報告されていることにある．当該例はいずれも中期終末から後期前葉に限られ，特に宮崎遺跡では土器内部に黒曜石と共に頁岩剥片を収納した資料も報告されており，更にその埋甕の上面には巨大な板石が覆うように設置されていた（長野市教育委員会1998）．山梨県の三光遺跡例でも土器口縁部の上位面に平石が蓋のように置かれていたことが報告されている（奈良・保坂1993）．また神奈川県の北原 No.9遺跡では後期（堀之内式）土器の中に残された黒曜石17点について原産地分析をおこなった結果, その総てが霧ケ峰産であったことが判明している（神奈川県立埋蔵文化財センター1994）.

このように中期末から後期前葉の時期に限って黒曜石が土器に納められているという事実，しかもそのような土器への収納行為が一部を除き，黒曜石原産地周辺ではなく長野県北部や山梨県南部，神奈川県などと言った原産地から離れた周辺地域に顕在化している事実は極めて重要と言えよう．希少性の増大が社会的な価値の増幅を生み，その扱いに変化を生じていると見做すことが適切と考えている．加えて山梨・神奈川などの地域には，伊豆や神津島など他の原産地からの黒曜石が断続的に遺跡内へと持ち込まれている筈であるが，北原遺跡例で確認されたように他産地の資料と混じらずに霧ケ峰産黒曜石のみが土器に一括収納されていた事実も見過ごすことができない．土器収納という行為がそこに納められる遺物の単位性なり一括性を崩さず，意図的になされた点を明示しているからである.

改めて磨製石斧の収納例について見ると，磨製石斧の興隆時期や地域との関係性は希薄と指摘せざるを得ず，中期から後・晩期に至る時間幅のなかで少数ながらも広範な東日本地域での存在が確認されている．土器収納に際しては幾つかの類型が見られ，５点以下を収納した事例と10点前後を収納した例が存在する．前者は石斧が蛇紋岩や碧玉，硬玉などと言った非在地系の石材を用いた磨製石斧が収められており，石神貝塚や正面ヶ原 A 遺跡のように欠損品さえも製品と同様な扱いがなされていた様子が窺われている．磨製石斧では一般的に再利用や転用例が顕著であることから，希少性を背景とした社会的扱いが想定されたところであり, 宮崎遺跡や博毛遺跡, 広原遺跡，そして塚場遺跡などの例はそれ故に交換財として一次的に保管されていた可能性も否定できないが, あくまでそれは「生産財」としての磨製石斧であって決して儀礼的性質を付与されたものではなかったと理解している.

一方，多数収納事例では大中小それぞれの磨製石斧の組み合わせが確認され，しかもそれぞれが石材を違える傾向をそこに見出すことができた．同じ緑色岩から製作されている塚越向山遺跡例についても，同一のものではなく少なくも２種類以上の産地を違えた緑色岩が用いられたようである．武蔵台遺跡や上中丸遺跡，上土棚南遺跡，秋大農場南遺跡などでも在地や周辺地域の石材を使用した磨製石斧が一旦集められ，その中から小型･中型･大型など形態的組合せを考慮したうえ，改めて土器への一括収納を果たしていたと考えられる．即ち，同じ土器に収納された大型・小型のそれぞれに分類される定角式磨製石斧が，石材のみならず形態的に酷似しているのは同一石材・人物が製作に関わっていたからであろうし，そのような由来・系統を違えた磨製石斧資料が集落内でセット化され，そのうえで同一土器個体の中へと収納された可能性を指摘しておきたいのである．大きさを違えた複数の磨製石斧を収納するに際しては，効率的且つ安定した状態を保持するよう重ね合わせることに加え，側面方向から補強するような配置も心掛けた様子が確認でき，更には空隙部への粘土等の充填についても指摘されているとおりである．いずれにしても収納行為自体に時間差を窺わせる状況的証拠はなく，黒曜石等を載せたうえで平石を用いて蓋をするまでの埋納行為は中断することなく進められていったと考えてよいのであろう.

このように捉えるならば，塚越向山遺跡や上中丸遺跡，武蔵台遺跡などは石斧埋納行為を良好に保持した事例と認識することができる．腰巻遺跡や秋大農場南遺跡なども磨製石斧の形態組成（大中小型品の組合せ）や収納状態等（小型品を底部側に設置）を考慮するならば,

これらは取り出し等の行為が希薄な状態を示しているのであろう．その一方で上土棚南遺跡では通常の収納状態で最上位面に設置される大型品が見当たらず，中型品と小型品のみの収納が見られることから，大型品が取り出された状態にあることを物語っている．久保ノ坂(No.4)や河原塚では土器底部に磨製石斧１点のみが残されており，収納後にその大半が収納容器内から持ち出された収納事例と捉えることができようか.

５　まとめ

集落内や近隣接地にこのような磨製石斧を一括して収納・保管した背景として，著者は地域社会内での物資流通システムとの関連性を考えている．原産地を控えた遺跡で量産された磨製石斧が地域社会を構成した各集落へと流通する機会は，決して恒常的なものではなくて断続的な期間を挟む周期的なものであったと判断して良いだろう．収納された磨製石斧が恐らく機能（用途）差を反映するように大中小の構成を有する意味は，生産地からの流通が用途に応じたセット関係を意識しながら流通・配布されていたことを明示しており，土器収納事例に於いてもそのようなセットが保持されていたことが追認できる．地域社会の一員として各集落単位で入手した磨製石斧のなかから選別し，幾つかのセットを構成してそれを土器に収納しておく，これによって日常使いの磨製石斧の欠損や補充の際，適時，収納された磨製石斧を取り出すことで円滑な木材加工や木製品製作を遂行していったに違いない.

日常生活に於ける消費材の最右翼とも言い得る磨製石斧．しかし硬質でありながらも加工し易く，衝撃に強いが敲打・研磨による整形が可能，更には衝撃にも耐える柔軟性も兼ね備える磨製石斧の素材となる石材は決して多くはない．中部日本地域で磨製石斧の素材として一般的である緑色岩，硬砂岩，蛇紋岩，透閃石などを産出する場所は意外にも少なく，原産地を控えた河川流域でも大型品の製作に耐え得る形状の礫は上流部にその分布が限られてしまう．打製石斧が特定の生産遺跡を持たないのは多くの在地系石材を用いた製作が可能だからであり，石器の製作とその機能を考えた場合に石材選択の幅は非常に広い．一方で磨製石斧の場合は上記したように利用石材が限定されることから，一般的に原産地下やその周辺での集中的製作が一般的である．糸魚川周辺に於ける磨製石斧製作跡である六反田南遺跡や境Ａ遺跡については良く知られているが，関東地方では僅かに神奈川県尾崎遺跡（中期），埼玉県寺坂遺跡（中期）・東原遺跡（前期）等が挙げられるに過ぎない．その他に原産地周辺に小規模な製作遺跡の存在は否定できないが，いずれにしても原石ではなくて磨製石斧が製品や未製品状態で各地へと流通していた点は確かであろう．ただし，緑色岩や凝灰岩などを素材として製作された磨製石斧の流通域は，基本的には各地の土器型式圏域を中心とした流通範囲に留まっている印象がある．これに対して糸魚川周辺の透閃石・蛇紋岩製の磨製石斧については，そうした地域圏を超えたより広域的な分布が確認されている．良質な石材を素材とした糸魚川産磨製石斧については原産地周辺（宮崎遺跡）ばかりでなく，その周辺地域にも広域的に流通していたことが広原遺跡や博毛遺跡，そして塚場遺跡などの土器収納資料からも明らかである．在地石材製の磨製石斧に比べ，その社会的価値がたかくて扱いがより丁重であったことは石神貝塚の事例からも窺われ，刃部再生や再加工などを経てのリメイクを視野に土器内部へと保管されていたと推察できる.

縄文人にとって生活必需品である磨製石斧は黒曜石などと同じく，基本的には生活圏内での入手が不可能な搬入資材として位置付けられていた道具であった. しかも，大型品ともなる15cm 以上の製品ではその重量が200～500g にも及ぶのが通常で，大口径の原木伐採からその加工，浅鉢や壷，皿，椀などの木製容器から石斧柄，丸木弓などの木製用具の製作，更には住居用木材の分断・加工，水場の貯水升の設置や木杭の製作など，磨製石斧の用途範囲と使用頻度は実に広範に及び，縄文人にとって磨製石斧の装備確保とその維持は，生活を続けるうえで決して避けて通れない重要事項であったと認識される．土器に収納された定角式の石斧はそのような様々な生活・生産の場面で効力を発揮する道具であり，大中小の形態差はそのまま上記した場面での使い分けを反映していたと評価することが適切であろう.

道具としての汎用性が極めてたかい必需品としての磨製石斧であったが，多くの集落にとってその補充は他地域からの定期的な供給を待つしかなかった．使用場面・頻度に見られるその汎用性に比べ遺跡毎に発見・回収される磨製石斧の出土量が極端に少ない背景には，破損・欠損後に於ける再加工や再利用・転用などが著しかったことが強く影響しているのであろう．磨製石斧に残るリダクションの痕跡や敲石への転用など，磨製石斧が破損後にも如何に大切に扱われ，また貴重な石材を究極まで使い切るという縄文人の「道具扱い」については，改めて説明するまでもない周知の事実と言えよう．

本論では具体的な収納事例の検討を踏まえて，集落内やその近隣に磨製石斧を収納した土器を埋設する行為について，磨製石斧を原産地の遺跡で大量生産して製品を主に地域社会を構成した集落へと供給する，そうした社会システムの稼働に伴い勘案された一つの保管・管理の発現形態と捉えるべき視点を提供した．そのような行為が中期末から後期前葉の変革期にピークを迎えること，同様な行為と現象が磨製石斧に留まらずにオオツタノハ製貝輪や硬玉製装身具，更には黒曜石などを対象としても顕在化している事実は，こうした各種遺物の土器収納という行為が社会的な性格を帯びていたことを彷彿とさせている．それがどのようなものであったか，その探究を次なる研究のテーマとして掲げておきたい．

謝辞

本論の構想から資料見学・検討を含めて多くの方々にお世話になった．阿部芳郎氏には当該資料の評価や埋納行為を含めて後期社会の姿についての議論にお付き合い頂き，多くの示唆と刺激をいただいた．また田中氏の論考（田中1995，2000）と小此木氏の論考（小此木2009）は本論を執筆するうえで大変参考になり，結論についても両氏の指摘事項の多くを追認することとなった．この場を借りて感謝申し上げると共に，今後は黒曜石などの収納事例を含めた総括的研究を進めてゆきたい．資料調査等では市川健夫，小久保拓也，片岡洋，深澤靖幸，篠原　武，副島蔵人，砂田佳弘，中沢道彦，大工原　豊の各氏，並びに富士見町教育委員会，富士見市教育委員会，喜多方市教育委員会，八戸市是川縄文館，富士吉田市教育委員会にお世話になった．なお本論は査読者の指摘により改善されたことを付記しておきたい．

註

1）他に千葉県加曾利南貝塚と茨城県南高野貝塚からオオツタノハ製貝輪の未製品が検出されている．いずれもまとまって出土していること，特に加曾利南例では入れ子状に重なった出土状態が確認されており，何らかの容器内へと収納されていた可能性はたかい．磨製石斧でも同様に土器ではなく土坑内から複数点が検出されている例があり，今後は収納状態の違いが何を基準としているのか検討する必要があろう．

2）報告では「緑泥片岩」「結晶片岩類」と分類されている資料について観察し，それぞれ凝灰岩類と判断した．

3）同じ岩壁部に沿ったテラス部には磨製石斧と同様に磨石が複数点，並べるように置かれた状態で出土したことが２箇所で確認されている．山間部での堅果類採集と一次処理を目的に本岩陰遺跡が定期的に利用されていたことが考えられ，皮むきや粉砕に用いる道具の仮置き状態を示していると理解される．磨製石斧も同じ目的のもとに土器へと収納されていたのであろう．

4）なお，磨製石斧１点が調査段階で注口土器破片と共に回収されており，本資料も本来的には土器内に収納されていたものと考えて良いものなのであろう．本遺跡では土器と磨製石斧，その上部に設置された黒曜石塊，そして板状の礫による蓋と，磨製石斧の土器収納行為の全容を示す事例として極めて重要である．

5）報告書では磨製石斧は６号土器埋設遺構から出土した土器に入っていたとされるが，全測図では６号の埋設箇所は示されておらず，その一方で「１号石斧埋納遺構」との別の表記が認められる．出土状態の詳細も含めた基本的な記録化がなされていなかった点は非常に悔やまれる．本論では後者（１号石斧埋納遺構）を６号土器埋設遺構と捉えて検討を進めている．

6）山科氏によれば，八ヶ岳を中心とした縄文時代遺跡に見られる黒曜石の集積を見ると，長野県全体で前期から晩期までの遺跡53遺跡から合計115箇所の黒曜石集積が確認されているという（山科2010）．そのうち住居内の集積が33例，住居内のピット内に集積された例が９例，住居などの遺構に伴わない集積が58例，集落内のピットで確認されたものが15例である．住居よりもそこを離れた集落内での集積事例が多く，またピットなどの遺構に伴う例も少ない傾向が顕著に伺われる．いずれにしても土器の中に収納された事例については例外的と考えて良いであろう．

引用文献

青森県八戸市教育委員会　1983『八戸新都市区域内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ　笹子遺跡（３）』，230p.，青森

秋田市教育委員会　1992「秋大農場南遺跡」『秋田市都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』，113p.，秋田

綾瀬市教育委員会　2008『上土棚南遺跡　第５次～第７次調査の記録』，374p.，神奈川

茅野市教育委員会　1957『尖石』，269p.，長野

福島県耶麻郡高郷村教育委員会　1985『博毛遺跡』，162p.，

福島
富士吉田市教育員会　2016『上中丸遺跡（第１次）富士吉田市文化財報告書　第10集』，144p.，山梨
岩瀬　彬　2015「土器に埋納された磨製石斧の使用痕分析：千葉県松戸市河原塚遺跡を事例に」『松戸市立博物館紀要』22：15-30
合角ダム水没地域総合調査会　1995『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書　合角川入岩陰遺跡　下平遺跡　塚越向山遺跡』，609p.，埼玉
神奈川県立埋蔵文化財センター　1994『宮ケ瀬遺跡群Ⅳ　北原（No.9）遺跡　北原（No.11）遺跡』，396p.，横浜
神奈川県埋蔵文化財センター　1998『宮ケ瀬遺跡群ⅩⅥ　久保ノ坂（No.4）遺跡』，456p.，横浜
栗島義明・別所鮎実　2020「冬木Ａ貝塚出土のオオツタノハ製貝輪　―貝輪収納事例と派生する問題―」『埼玉考古』55：5-80
栗島義明　2020「オオツタノハ製貝輪を巡る諸問題」『考古学集刊』16：47-66
松戸市史編纂委員会　1959　『松戸河原塚古墳群』，54p.，千葉
松戸市立博物館　2016『平成28年度企画展　石斧と人　３万年のあゆみ』，71p.，千葉
武蔵野市史編纂委員会　1982「武蔵野市御殿山遺跡調査報告」『武蔵野市史　資料編』，pp.6-31，東京，武蔵野市役所
宮下健司　1984「宮崎遺跡」『長野県史　考古資料編１巻（２）主要遺跡（北・東信）』，pp.175-179，長野，長野県史刊行会
松村和男　2018「群馬県内の蛇紋岩類について」『ナイフ・石鏃・石斧　―石材資源とその流通―』，pp.37-40，東京，明治大学黒耀石研究センター
奈良泰史・保坂康夫　1993「黒曜石原石格納の土器と黒曜石について」『山梨懸考古学会誌』6：1-8
長野市教育委員会　1998『宮崎遺跡』100p.，長野
長野県富士見町教育委員会　2021『広原遺跡』64p.，長野
中村由克　2010「野尻湖遺跡群における石斧石材の再検討―「蛇紋岩」とされた石材の正体をさぐる―」『日本考古学協会第76回総会研究発表要旨』76：126-127
長崎元廣　1984「縄文の黒曜石貯蔵例と交易」『中部高地の考古学Ⅲ』，pp.108-126，長野
小田静夫・金子裕之・金子浩昌　1975「埼玉県石神貝塚」『埼玉考古』13・14：1-86
大森隆志・須賀博子　2015「縄文時代における土器内蔵の磨製石斧　―松戸市河原塚遺跡例の検討―」『松戸市立博物館紀要』22：1-14
小此木良子　2009『埋納土器についての考察』，63p.，東京，放送大学
笹津海祥　1956「小形石斧を収蔵せる注口土器の一例」『石器時代』3：62
佐藤雅一　1999「正面ヶ原Ａ遺跡」『平成11年度　津南町遺跡発掘調査概要報告書』，pp.16-20，新潟
都立府中病院内遺跡調査会　1996『武蔵国分寺跡西方地区武蔵台遺跡Ⅲ』，65p.，東京，国分寺市遺跡調査会
田中英司　1995「日本先史時代のデポ」『考古学雑誌』80-2：1-71
田中英司　2000「斧のある場所」『日本考古学』7-9：1-19
梅沢重昭・飯島義雄　1983「七つの磨製石斧　―群馬県多野郡吉井町大字吉井字腰巻出土の一括資料―」『群馬県立歴史博物館紀要』4：29-50
山科　哲　2010「黒曜石の一括埋納例と流通」『移動と流通の縄文社会史』，pp.84-87，東京，雄山閣
八幡一郎　1928「最近発見された貝輪入蓋付土器」『人類学雑誌』43-8：357-366

Natural Resource Environment and Humans
No. 12. pp. 1–19. March 2022.

Pottery stored ground stone axes

Yoshiaki Kurishima [1 *]

There are examples of ground stone axes stored in pottery diverted for use as a vessel in the Jomon Period. Data of 18 examples were compiled nationwide, from Middle to Final Jomon. There wasn't a specific type of pottery used for storage, such as deep bowl, gourd-shaped, and spouted pottery. Also, most pottery showed reddening of the surface from being heated, or had adhered soot, an obvious sign that they were diverted as storage vessels. Ground stone axes stored inside are so called regularly curved (*teikakushiki)* stone axes, the number of axes stored ranges from one to ten at the most. Basically, defective pieces were not stored.

Most of the ground stone axes stored in pottery are finished pieces, and the typical way of storage is placing small axes at the bottom, medium pieces over them, then larger pieces on the top. A part of data shows that it was further covered by obsidian and a slab-like stone was placed like a lid.

Through examination of ground stone axe storage and used material stones, the background of storing finished ground stone axes in pottery was inferred as follows. The ground stone axes manufactured from specific material stone were valuable, and opportunity of acquiring them such as trade was limited. Therefore, it was assumed that ground stone axes that were able to be obtained from time to time were stored within or around a settlement and were taken out from storage to be used as needed. Such storage of ground stone axes in pottery was evaluated as a measurement taken by the Jomon people to utilize limited resources efficiently and frugally.

Keywords: teikaku style polished adzes, depots, Jomon period, Japan

（Received 8 December 2021/ Accepted 19 January 2022）

1 Center for Obsidian and Lithic Studies, Meiji University, Kanda-sarugaku-cho 1-6-3, Chiyoda, Tokyo 101-0064, Japan
* Corresponding author: Yoshiaki Kurishima (yo_kuri@meiji.ac.jp)